



四万十町
町内「ぶら〜」散策

希ノ川



打 井川から国道381号を西へ走る。上岡、下岡と過ぎると抜水橋があり、希ノ川への標識が見える。この抜水橋あたりを含め、抜水橋を渡った向こう岸、さらにそこから南下した地区が希ノ川である。地区をさらに南下すると程なく峠に差しかかる。この峠の向こうは中村の片魚で、希ノ川地区からは30分とからない。そのような位置にあるので、昔から片魚との交流が盛んであった。養子縁組、婚姻など、両地区のつながりは深い。

平成の大合併で四万十町となるにあたって、それまでの「四手ノ川」から「希ノ川」に改名した。戦国期の記録にはすでに「四手川村」「四手河村」「川津村」「四手ノ村川津村」などと記されている。そもそもは「上岡四ヶ村（上岡下岡、四手ノ川、瀬里）」のひとつで、上岡村庄屋の支配下である名元が置かれていた。

打井川などと同じく、希ノ川の抜水橋の下にも、以前は沈下橋があった。沈下橋ができる前は、これも他の地域同様、住民が交代で「舟番」を務める「渡し」。住民たちにとって積年の念願だった沈下橋は、昭和26年、住民たちが費用を出し合うという形で完成した。あと7〜8年待てば、県から費用が出たのだというが、それを待てなかつたくらい、住民の「橋待望論」が強かつたに違いない。

この橋は、そのような建設の経緯だったこともあり、できるだけ無駄を省いた。これが当時の子どもたちの楽しみを生んだ。橋桁の根本周辺に「鉄筋の隙間」がいくつかあり、ここに魚が集

まつたのだそう。当時の子どもたちは夢中になって魚を獲ったという。そんな沈下橋も他の例に漏れず、抜水橋建設の条件として撤去された。昭和56年のことである。

この頃の子どもの通学は、国道からはバスであった。このバスの通過時刻が7...05。朝早過ぎて、冬場は特に難儀したそうである。また、雨の日などは、普段自転車通学、通勤する人も利用するため大混雑。積み残しが出るので急遽、臨時のバスが出動するという事態が頻発した。

ところで、希ノ川地区には国有林があった。これは、藩政時代の「御留山」である。良質の木材を有する山として指定されていたのである。現在は町有林になっているこの山に、それはそれは立派な杉の大木があった。この杉の切り株は「大人が寝ても足が出ないくらい」の直径だった」という。

地区の産土神は、菅原道真を祀る天満宮である。また、現在の集会所の南100m辺りにあった茶堂が、今は集会所に移されている。



戦後すぐ、住民が集まって天満宮前で撮られた写真。「天満宮は変わらないけれど、人の数がね〜」と地区の方。

町のうごき		人口		前月比		出生		死亡		転入		転出	
男	7,746	-3	男	6	13	18	14						
女	8,486	-17	女	2	17	14	16						
計	16,232	-20	計	8	30	32	30						
世帯数	8,281	-14					(7月中の届出)						

窪川地域	11,517人	大正地域	2,244人	十和地域	2,471人
------	---------	------	--------	------	--------

四万十川の 水質状況		適正值(mg/l)	
リン酸		長雨により 調査休止	
硝酸			
アンモニウム			
アニオン活性剤			
化学的酸素要求量			

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部